

Title	宗教集団の類型と変動の理論
Author(s)	三木, 英
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59330
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	三木 英 ^{ひづる}
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第 24963 号
学位授与年月日	平成23年9月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	宗教集団の類型と変動の理論
論文審査委員	(主査) 教授 川端 亮 (副査) 教授 友枝 敏雄 准教授 稲場 圭信

論文内容の要旨

本稿は宗教集団論の新たな理論を模索し、それによって宗教学の発展に寄与することを目指したものである。

宗教集団論といえば、M.ヴェーバーやE.トトレチ、R.ニーバーやB.ウィルソン等によるチャーチセクター・ノミネーションといった集団類型が想起されるが、第一章はこの宗教集団類型論のこれまでの展開をトレースすることに費やしている。そして先の諸類型がキリスト教に偏したものであること、それゆえに日本における宗教集団への適用の容易ではないことを確認した。さらに、そのことを認識した上で日本の研究者による宗教集団類型論を概観し、それらもまた日本という特定宗教文化圏でのみ有効であって、通(宗教)文化的比較を為すにあたり十分なものであることを主張している。

第二章では、既存のものに代わる、新たな諸類型を呈示した。(集団指導層による)組織運営-ネットワーク形成、(集団成員による)権威志向-自律志向という二組の変数によって成立する①権威志向型組織、②権威志向型ネットワーク、③自律志向型組織、④自律志向型ネットワークがそれぞれである。これら新類型の案出にあたってはR.スタークとW.S.ベインブリッジのカルト論を参照し、それを批判的に継承した。四つの新類型によって、世界に活動する宗教集団を捕捉することが可能となったはずである。

その四つの新類型に基づき宗教集団の展開(類型間移行)を論じたのが第三章である。そして移行にあたり、(ネットワークと組織の間の移行については)集団が成員に対して提供する約束というべき代償(compensator)の普遍的であるか特定のであるかが作用することを——スターク&ベインブリッジの議論にしたがい——指摘し、(集団成員が権威を志向するか自律を志向するかは)環境の確実視あるいは不確実視がそれを促すことを——コンティンジェンシー理論に手掛かりを求めて——指摘している。宗教学における集団論は未だに先のヴェーバー等による類型論が中心的であり、それは宗教集団の静的把握に供するとしても動的分析へと適用されることは少なかったように思われる。それでは変転著しい現代世界における宗教(集団)研究には物足りない。第三章は宗教集団の時間軸上の展開を読み解くための図式を呈示したのである。

そしてその図式の有効であることを示すため、図式を現実の宗教集団に適用したものが第四章である。日本の巨大新宗教である立正佼成会が、ここでは俎上に載せられている。戦中に発足し戦後に大発展を遂げた立正佼成会について、これまでの研究は教義に詳しい理論家とカリスマ的な霊能者の二頭体制の妙により成功を取ることができたか論じてきただろう。それを否定するものではないが、ここでは立正佼成化が発足から巨大化するまで、集団(組織)タイプを変容させることで、そして組織や成員が直面する環境に適切に対応してきたことにより、発展を遂げたことを詳細に論じている。これまでの研究が比較的等閑視してきた宗教集団における組織運営という側面が集団の成否に大きく影響することを、第三章に呈示した図式に基づき、示したのである。

第五章は宗教ネットワークの——とりわけ自律志向型ネットワークの——宗教学研究にとっての重要性と、その将来的展開について図式に依拠して考察を及ぼしている。このネットワークは、本稿にいう(社会のマジオリティである)宗教的無党派層から現れるもので、現代世界の遍在宗教というべき——E.デュルケムという「人間崇拜」を最も純粹・鮮鋭に保存していると見られる。人間崇拜は所謂宗教団体にも当然に浸透しているものであるゆえに、このネットワークは宗教団体に対抗的インパクトを及ぼしうる。それが重要視する根拠である。また人間崇拜の徒から成るネットワークは、人間至上の価値観を持つがゆえに、容易に特定の人間への崇拜を核とする集団タイプへと移行しうるだろう。「カルト問題」の背景はここにあると考えられる。

本稿は理論の研究を主眼としたものである。それは、現今の宗教学が調査研究に傾き、理論研究の蓄積を怠ってきたために停滞気味であると認識するからである。ここで理論研究を行なうことは、この学問の前進につながるはずである。終章は宗教学における本稿の意義について、述べたのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、宗教類型の理論的な研究であり、次の2つの特徴を持つ。

まず第一に、グローバルな視点を持つことである。宗教並びに宗教教団は、キリスト教が中心の欧米と日本において大きく異なり、どちらにも普遍的に当てはまる類型論はなかった。第二に、従来の研究における宗教は、イコール教団のことであり、教団宗教の類型論が研究されてきたが、近年の組織離れ、スピリチュアルブームなどを鑑みると、必ずしも教団に属していなくても宗教的な心性をもつ人々も重要であり、かれらの緩やかな集団をも分類するものである。

第一章で欧米の類型論を日本の宗教に適用することも、逆に日本の類型論をキリスト教文化圏に適用することも難しいことを示した後に、第二章においてスタークとベインブリッジのカルト論に注目し、これがキリスト教文化圏の概念でありながら、日本の宗教集団論に適用可能であることを論じる。かれらのオーディエンス・カルトとクライアント・カルトの類型をカルト運動の類型と対比させることによって、権威志向と自立志向という軸を、オーディエンス・カルトとクライアント・カルトを対比させることで、組織運営とネットワーク形成という軸を導き出す。宗教学本来の意味でのカルトは、キリスト教に限らず新しい宗教文化を生み出すもので、それに基づく権威-自律志向や組織-ネットワークという分類軸は、普遍的で日本でもキリスト教圏でも適用可能である。そして権威志向型組織、権威志向型ネットワーク、自律志向型組織、自律志向型ネットワークの四類型の相互の移行要因を明らかにしたのが第三章で、そこではスタークとベインブリッジの代償(救済)の特殊性と普遍性という要因と組織論から導入した環境の確実性、不確実性が挙げられている。

キリスト教の影響下にあるスタークとベインブリッジの概念から主として作られた4類型とその移行要因をもって、現実の日本の宗教を論じるのが第四章の立正佼成会の例であり、そこでは権威志向型組織類型が中心に論じられる。第五章の自律志向型ネットワーク類型を中心とするスピリチュアルな人々、かれらを本論文では宗教的無党派層と呼ぶが、宗教的無党派層が、自律志向型ネットワークが発生してくる社会層と把握される。人間の生命や尊厳を何よりも尊重し、聖なるもののように神聖視する人間崇拜が伝統的宗教に代わる新しい信念であり、日本のスピリチュアル探求者達、宗教的無党派層の宗教性として論じられる。

本論文は、日本の宗教学の中で、近年見られない理論的な宗教類型論であり、アメリカのカルト論と組織論からのコンティンジェンシー理論によって、従来の宗教の類型論を超える成果をあげている。それは、日本の宗教文化、キリスト教文化を越えて普遍的に論じることのできる宗教類型論であること、この類型論で宗教集団の変容、移行過程が説明できること、官僚的な組織だけでなく、ネットワークをも対象とし、そこから新たな宗教集団の発生を論じられる広い射程を持つ点であり、いずれも高く評価することができる。

よって、本論文は博士(人間科学)の学位授与にふさわしいものと判定する。